

# 『修紫田舎源氏』考

## 『源氏物語』と比較して

井上多賀子

### 序

合巻の代表作と言われる、柳亭種彦の『修紫田舎源氏』(四十編)は、文政十二(一八二九)年に初編が出版された。これは、『源氏物語』の翻案で、当時、大ベストセラーとなった。種彦は、当時の読者に受け入れられるように『源氏物語』を脚色したのであるが、それは、どのようなものだったのかを考察してみたい。

### 本論

#### 第一章 趣向と構成

柳亭種彦は、『修紫田舎源氏』執筆に当たり、最初から確固たる構想を持っていたのではなかった。種彦は、まず『源氏物語』の紅葉賀までの腹案を考えていた。ところがこの小説は大評判となり、次に、明石までと目標を立てたのである。そして、『源氏物語』五十四帖を全て翻案するとの考えを明らかにしたのは、三十六編になってからのことである。このような無計画性は、二編・十二編・二十四

編などを見ると明らかである。原作の一つの大きな山場である車争いの趣向を、二編に取り入れ、原作の葵に当たる十二編の序で、「はやりたるがいと悔しう」と後悔している。また、本来ならば、二十七編で登場するはずの人物の性格を、二十四編に登場する人物に与えている。これも「さまで長くは続くまじ」と考えてのことである。この無計画性は、執筆態度の変化でも明らかである。作者の態度に、最初に変化が見られるのは、十編である。それ以前は、原作から離れることを望んでいたが、十編に至り、「次の編より狂言の水をうめて温くせん」と、歌舞伎仕立ての趣向を控え目にしようと考えてるのである。

さて、そこで、『修紫田舎源氏』における趣向について考えてみることにする。その工夫を凝らした趣向の一つには、『源氏物語』の筋に沿って、様々な事件を組み込み読者に、その謎解きの楽しみを与えるという、推理小説の手法を採っているということがある。嫉妬、そして、人違

陰謀の数々、つまり、足利家の後継者選び、家来の謀反というお家騒動を、縦糸とするならば、横糸は、それらに絡んで起こる事件、すなわち、足利家の三宝の搜索である。そして、犯人や背後関係の手がかりとなる伏線を、至る所に敷き、また二人一役や替え玉を使うというような、様々なトリックを用いている。

そして、この小説におけるもう一つの趣向は、歌舞伎的趣向、つまり、芝居めいた手法である。前述したように、この物語の軸は、お家騒動で、このことそのものが、すでに歌舞伎的なものとなっている。また、作者は、因縁めいた話や、兄妹・親子の対面という、愁嘆場面を設け、芝居的な話を創っている。さらに、会話において、その背後関係を、読者に知らせる手法を採っている。つまり、説明的口調の会話をしているが、これは、小説として見た場合、不自然さが残る。しかし、芝居の脚本であるならば、このようにならざるを得ない。そこで、芝居の雰囲気を出したい作者は、その不自然さを承知で、説明調会話を採り入れたと言える。

以上、述べてきたように、原作を脚色し、種々の趣向を設けた作者が、構成の面で、原作を、どのように脚色したか、考えてみることにする。この小説は、原作に沿って、物語が進められている。しかし、『修紫田舎源氏』の六編から十一編まで、十四編から十六編まで、二十一編から二十五編まで、三十編から三十四編までの各箇所に、『源氏物語』の各巻との相違が見られる。表1から明らかに、原作の若紫、末摘花、紅葉賀という順序を、かなり入

表1 『修紫田舎源氏』の構成

編	主要事項	原作の巻
六・七	① 光氏、瘧病みのため、野中の里を訪れ、紫を発見。	若紫
七・八	② 光氏、稲舟と会う。しかし、契りを結ぶのは綾評。	末摘花
八	③ 光氏、紫を人質にしようとする。	若紫
九	④ 紅葉の宴	紅葉賀
九	⑤ 光氏、紫を嵯峨の館へ引き取る。	若紫
十	⑥ 光氏、紫を愛育。	紅葉賀
十	⑦ 稲舟姫と紅が入れ替わっていたことがわかる。	末摘花
十・十一	⑧ 藤の方出産。	紅葉賀

注：表1の番号は、表2の番号に対応する。  
表2 『源氏物語』の構成

巻	主要事項	巻	主要事項
紫	① 源氏瘧病みの加持のため、北上山へ赴き、紫の上を発見。藤壺懐妊。	花	② 源氏の末摘花、雪の訪ね夜
③ 源氏、紫の上を執心。	④ 紅葉の賀	⑦	源氏朝花を雪の訪ね夜
⑤ 源氏、紫の上を二条院に引き取る。			
⑥ 紅葉賀	⑧ 藤壺出産	⑦	末摘花を雪の訪ね夜
若	⑧ 紅葉賀	⑦	末摘花を雪の訪ね夜

れ替えている。しかし、この順序は、原作を無視して書かれたものではない。表2で明らかのように、『源氏物語』の各巻は、同時進行している。原作では、各巻毎には、時間の経過通りに書かれてはいるが、全巻を通してみた場合、必ずしもそうであるとは言えない。そこで、種彦は、巻の順序にこだわることなく、時間の経過に従い、この小説を書いたのである。このため、この小説では、各巻の混合が成されているのである。

このように、原作の各巻の順序を入れ替えたり、前述したように、歌舞伎仕立て、また、推理小説風にした作者の苦心は、相当なものだったと言える。このようにしたのは全て読者のため、すなわち、読者に飽きられず、続けて読まれるようにするためだったと言える。

ところで、このような趣向は、二十三編以降は、かなり薄れている。しかし、単に、原作を追った筋で、読者の興味が尽きてしまうのを恐れた作者は、突然、三宝の一つの小鳥丸の事件を再び登場させている。しかし、この再登場は唐突であり、推理小説として、一つのミスであると言える。ただし、あえて、このような冒険をした作者の意図、すなわち、マンネリ化を防ぐという意図は、汲み取ることができる。また、その点においては成功したと言える。

しかし、この事件が真に解決した後、つまり、三十編以降は、再び、推理小説の趣向もなく、芝居の手法も見られず、原作と変わりばえのしない、やや冗漫なものとなっている。

このように、推理小説としての欠点の存在や、この小説の後半部分の冗漫さのため、完璧な小説とは言えない作品であるのにもかかわらず、評判を呼んだのは、歌舞伎の手法を採り入れ、推理小説としての楽しさを盛り込んだということが、理由の一つと言える。

## 第二章 五人の女性達

### 第一節 藤の方

藤の方の元の名は、猪名野谷といい、父は花満中将、母は足利義正の父義教の妹真弓の方であったが、花満家の没落のため、音川持之の養女となっている。山名宗全に言い寄られていたが、足利義正の側室となる。

ここでは、原作にある光源氏と藤壺のような関係は存在しない。足利光氏が藤の方に寄せる思いというのは、母に抱く感情であり、藤の方の、光氏に対する思いは母性愛で二人の間には、異性に対する思いめいた感情は一切見られない。作者は、密通事件の有無、それに対する世間及び桐壺・義正の反応、そして、二人の異性愛という感情の有無など、原作と正反対の設定をした。このような設定にさせたものは、この時代の風潮だと言える。仮にも母と呼ぶ女性と密通するということは、もち論、恋愛の感情を持つということさえ、当時の道徳が許さなかった。そして、それを題材にした小説は許されず、このため、作者は、密通事件はなかったということを余儀なくされ、それを前提として、この小説を進めていかなければならなかったのである。

また、原作の藤壺は薄雲の巻で死去するが、ここでは、作者は、藤の方を死去させていない。藤壺の死は、秋山度氏が述べている<sup>(注1)</sup>に、「光源氏が、秘密によって支配されていた世界から解かれることにほかならなかった」のであり、また、「藤壺を物語の世界から完全に消去することによって、光源氏は、いまいちだんとそのかがやかしい体制をととのえ」るのである。このことも、二人の密通の事実が前提にある。従って、『修紫田舎源氏』において、密通の事実はないのだから、藤の方の死は必要なかったのである。

このように、『源氏物語』は、清水好子氏が述べている<sup>(注2)</sup>ように、「光源氏のすべての行動の原因を藤壺思慕の情に集中した」小説で、源氏は、他の女性に対しても、藤壺の面影を重ね、あるいは、比較し、藤壺こそが理想の女性としてしている。しかし、ここでは、藤の方を思慕するということが存在していないため、光氏が他の女性を見る場合、原作とは、当然違ってくるのである。つまり、藤壺と藤の方への思いの違いが、両作品の相違を決定的なものとしていると言える。

## 第二節 黄昏

黄昏の母凌晨は、山名宗全にそのかさされ、小鳥丸を盗む。光氏は、犯人は凌晨であると目星を付け、娘黄昏に近付く。

原作における夕顔は、内気で、増田繁夫氏が述べている<sup>(注3)</sup>に、「自己の意志をあらはにせず、どこまでも相手に

従ひ、自己の置かれた状況に受動的に流されていくような弱さ」のため、物の怪に殺される。しかし、黄昏は、内気ではあるが、自分の意志で行動する女性である。母よりも光氏を選び、母の悪事を告げ、身の危険を教える。そして身を挺して、光氏を守るために母と争い、母が改心するようにと、自害までする。ここでは、黄昏は、原作に見られるような主体性の無さは見られず、むしろ、自己の意志を貫く強さを持った女性となっている。

光氏は小鳥丸詮議のための手段として、黄昏に近付いたのであるが、これは、江戸時代という、妻以外の女性に、恋愛感情を持つなどということができない時代のためであり、平安時代に書かれた原作との相違は、ここから出て来ていると言える。

## 第三節 阿古木

阿古木は、六条三筋町に時めく遊女で、光氏の従姉に当たる。阿古木は、三宝の一つの短冊を、光氏に渡すことと引き替えに、この恋を叶えてくれるようにと迫る。そこで光氏は、仕方なく阿古木と添い臥することになる。

原作では、六条御息所に対し、源氏は、清水好子氏が述べている<sup>(注4)</sup>に、「高貴の身分、年上の女性、それらにふさわしい充実した人柄。あきらかに藤壺に代わりうる人」として愛する。つまり、御息所は、源氏の、藤壺への思慕は存在しない。従って、阿古木の存在価値も、当然、原作とは違ってくるのである。まず、家柄であるが、これは、原作同様、高貴な家柄である。このことは、將軍家の短冊

を持つ女性として、必然的に、高貴な家柄となるのである。そして、社会的地位は、遊女という、最も低いものである。阿古木は、藤の方の身代りでないため、遊女に身を落としてもかまわないのである。というより、遊女でなければならなかったのである。高貴な家柄に生まれた女性が、妻を持つ光氏に懸想し、積極的に愛を告白し、脅迫めいた言葉を発したりすることはあり得ない。そこで、作者は、この矛盾を埋めるために、阿古木を遊女にしたと言える。そして、源氏の御息所への思いと違って、光氏は、阿古木に対して、ひたすら嫌悪感を抱いているのみであるのも、阿古木が遊女であるためである。ここでは、光氏が藤の方に思慕していないということ、短冊を取り戻したいという念が、光氏の、阿古木への感情を、源氏の、御息所への感情とは異ならせたとと言える。

#### 第四節 紫

紫の父は花満中将である。従って、紫は、藤の方の姪に当たる。光氏は、紫の父遊佐国助と山名宗全の会話を盗み聞きする。そこで完全が謀反を起こそうとしていること、そして、国助を味方につけようとしていることがある。光氏は、それを防ぐために、紫を人質として引き取ることを考える。しかし、国助は、娘を人質にするのではないかと光氏を疑っており、光氏は、それを察し、国助の前で、紫に優しい言葉をかけ、国助の疑いを晴らし、この計画は成功する。紫は、光氏の妻二葉の上の死後、光氏の妻となる。原作では、源氏は、若紫を思慕する藤壺のような理想の

女性に育て上げ、妻にしたいと考えて引き取る。ここに、原作との相違が見られるが、光氏の藤の方に対する思いと源氏の藤壺に対する思いの相違が、光氏と紫源氏と紫の上の關係の相違になったと考えられる。光氏にとって、藤の方は、たとえ義理の間柄にせよ、母以外の何者でもなかったのである。このため、原作のように、紫を見る時、藤の方の面影を重ねて見るということもなく、紫を藤の方の身代わりと思う必要もないのである。そして、人質として引き取った紫であったが、人質としての存在の必要性がなくなった時、すなわち、国助が宗全と手を組むのではないかの疑いが晴れた時、光氏は、紫を真に愛することができるのである。ただし、その時、妻が存在してはならないのである。一夫一婦制のこの時代、表立って、妻以外の女性と交渉を持つことはできない。ところが、幸いにして、二葉の上は死去した。この二つ、つまり、人質としての役割がなくなり、かつ、妻の死去ということで、紫は、光氏の藤の方への思慕の不在、そして、人質という政治的思惑が光氏と紫との關係を決定づけたと言える。

#### 第五節 二葉の上

二葉の上の母は、足利義正の妹で、二葉の上は、光氏の従姉に当たる。光氏と結婚するが、その端正すぎる性格のため、長く不和な状態が続くが、玉兔の鏡の徳により、二人の心は通い合う。

光氏は、再三述べてきたように、藤の方を母として見ていたのであり、藤の方に恋愛感情を抱いていない。しかし

原作では、源氏は、藤壺が「心ひとつにかかり」（桐壺）また、「わが心のみあまりけしからぬすさびに」（紅葉賀）対し、反省し、葵の上に同情しているが、ここでは、藤の方に思慕する光氏は存在しないため、同じいと同志の結婚ながら、父夫婦と自分達夫婦の仲の違いを嘆いている。

また、紫を人質とすることを知らず、浮気心で紫を引き取ったと感嘆している二葉の上に同情している。このように、同様に同情している源氏と光氏であるが、藤壺と藤の方への思いの相違が、ここにも現われたと言える。二葉の上の病いが重くなった時、すでに玉兔の鏡により、夫婦仲は良くなっている。この時点で、『修紫田舎源氏』では、真の夫婦としての愛情を見せているのに対し、原作では、まだ、源氏の、葵の上への思いは、真に妻への愛情ではなかったと言える。

光氏の藤の方思慕の不在という理由から、光氏は、これまでの女性達を見る場合と同様に、藤の方と二葉の上を比較することはなかったのである。従って、光氏の、二葉の上に対する思いも、当然、原作とは異なってくるのである。

## 結 び

本論では、『修紫田舎源氏』と、原作である『原氏物語』とを、構成や人物の面から比較考察を進めてきた。

第一章で述べたように、一応の事件の解決が成された十二編を境として、前半と後半では、趣向に相違が見られる。すなわち、前半は、事件の解決という推理小説の趣向

を採り入れ、また、随所に、歌舞伎の手法を採り、原作の筋を追いながらも、かなり、密度の濃い小説となっているが後半は、事件の解決のため、読者が、謎解きをする楽しみもなく、単に、原作を室町時代に移し、登場人物の名を変えただけに過ぎない物語に留まってしまっている。

また、第二章で論じたように、原作では、光源氏の女性遍歴は、藤壺への思慕が原因となっている。しかし、『修紫田舎源氏』では、足利光氏の、藤の方へ寄せる思いは、母への愛情であり、そこには、男女間の恋愛感情というものも、全く存在していない。従って、光氏は、他の女性を見る場合においても、原作のように、藤の方の面影を重ねるといふこともないのである。これは、母子が恋愛感情を抱くというようなことを題材にすることができない時代であったためである。さらに、『源氏物語』のような女性遍歴をすることも許されない時代であったため、主人公光氏が、黄昏・阿古木・紫らに近付くのは、手段としての好色に過ぎないとしており、この時代の道徳の枠内に留めているのである。すなわち、源氏と光氏の行動の相違は、平安時代と江戸時代の道徳観の相違にあったと言える。

また、この時代の要求するものとしては、武士道主義・勸善懲惡主義がある。これらは、一夫一婦制に加え、この小説の基底と言える。つまり、光氏は、好色を、敵を欺くための手段として用い、それらの好色の手段の多くは、後に、実なき浮名であることが証明され、悪人は、後悔・改心したり、罰せられるのである。しかも、それが証明され

る以前においては、好色は、読者の享楽趣向を満足させるもので、それに加えて、当時、全盛期であった歌舞伎、さらに、謎解きの楽しみを与える推理小説の手法を採り入れたのである。こうすることで、時代の要求するものと、市民の要求するものの双方を満たすことになったのである。

確かに、この小説の後半部分は、変化に乏しい『源氏物語』の筋を追っているのみであるので、山場というものがなく、やや冗漫の感は脱ぐえない。しかし、作者が目指した、「歌舞伎、操り、物語三つが一つの絵草紙」(二編序)は、歌川国貞の挿絵と相俟って、成功したと言える。

注1 『源氏物語』秋山虔(岩波新書)

注2・4 『源氏の女君』清水好子(塙書房)

注3 『源氏物語の探究』五(風間書房)